しらうめようちえん
園だより 2022年度 第4号
白梅学園大学附属
白梅幼稚園
2022年7月20日発行
小平市小川町１－830

「たか2の世界」へようこそ

年長 たか2組

クラスでくらす

６月末に、年長組になってから遊んでいた遊びに、梅っこひろばでペアの、きりん組を招待しました。子どもたちは「お店やさん」「ディズニーランド」「鉄道博物館とロボット博物館」「カナヘビとうずらと人形のまち」の４つの遊びを行うことにして、この催しを「たか２の世界」と名づけました。

お店やさんでは、今までつくってきたお菓子やケーキの他にも、パンやお餅、動物の人形をつくって売ることにしました。仲間の出す意見をどれも「いいね」と受け入れていく姿がありました。ケーキやペロペロキャンデー、プリンは本物らしい形や色、透明感にこだわりました。パンは作る工程を工夫し、生地に見立てた綿を手でこねて、温かいテラスに置いて発酵させていました。綿では、動物や餅の柔らかさも表現しました。

製作中のラビューにはお客さんを呼びたいと、以前から話しをしていました。「お客さんに乗ってもらう！」「いや、車輪付けたらラビューが弱くなったから乗れないんだよ」「だから、見るだけ」「あ、見るだけだから博物館はどう？」「鉄道博物館にしよう！」「ぼくはロボット博物館やりたい。ラビューの隣に置いて見られるようにするの」「いいよ！一緒にしよう」――仲間の遊びと融合させて、隣にはロボット博物館があり、そして車窓からは恐竜の世界が見える、ラビューになりました。

ディズニーランドの遊びでは、人形が乗る小さな乗り物から始まり、そこから徐々に一緒に遊ぶ仲間が増えて、入って遊べるシンデレラ城を建てました。「ショーもやろう！」となり、歌う人や人形を動かす人など、やりたい役割に分かれて進めていきました。美味しいものを食べた思い出は、やはり強く印象に残っているのでしょう。「ディズニーランドで食べたよ」と、チュロスやポップコーンなどの食べ物も売りました。

４月から人形やカナヘビの家をつくって遊んでいた子どもたちは、幼稚園でウズラが生まれてからは、丸い体の特徴を捉えて、キャップでウズラの雛をつくっています。このグループは街をつくることに決めて、それぞれの家を中心に、道路や警察署やスーパーなどの建物から、縦の空間も使って空もつくり広げていきました。

時には「手伝うよ」と力を貸したり、上手くいかないことにはクラスの皆で一緒に考えたりしてきました。仲間の考えや思いを聞くことで、新しい発想が生まれ、違うやり方に気がついていき、「自分たちのやりたいこと」を子どもたち自身で実現していきました。（教諭・細井佑香）

ショーがにぎわっています

年中 ぞう組

クラスでくらす

ぞう組の部屋では、いろいろな劇やショーを始める姿があり、他学年のお客さんを呼んで楽しんでいます。人形劇では、自分たちでかいた動物に棒をつけたペープサートを動かしながら、友だちとやりとりしています。ブロックや積み木で台の上に家や公園を作り、「公園であそぼう」「おかし食べよう！パクパク…」「にじ色アイス買おうよ～」「もう夜だから寝よう」など、その場で思いついた出来事を話しながら人形劇が進んでいきます。周りの子も自分の動物をかいて加わっていく姿があり、メンバーが入れ替わりながら、集まってきた友だちと場づくりややりとりを楽しんでいます。

空の背景を使ったショーでは、夜空の「花火のショー」と、青空の「にじのショー」が開かれています。最初の頃は「花火のショー、やりたい」といって、棒につけたシフォンを振って花火に見立てていました。やがて、黒い布を手に取ると、星を貼って夜空の背景をつくり始めました。流れ星を動かせるように取りつけています。「暗くしたい」と電気を消すとさらに夜の雰囲気になり、たくさんの花火を打ち上げたりしていました。「にじのショー」では、「にじの空にしたい」ということで、水色の布に虹や雲を貼って、青空の背景が出来上がりました。そこに人形を動かす舞台をつくり、動物を用いてやりとりを始めていきます。にじのすべり台を滑るなど、背景を使いながらお話を進めていくところに工夫と面白さがあります。

一人がおばけのお面を作っていると、「やりたい」と周りの子も集まってきておばけの劇が始まったり、手づくりの絵本にとりかかると、客席を並べてすぐにお客さんを呼びに行ったりするなど、新しいことを始めると「お客さん呼んでくる！」と宣伝に向かいます。人形劇、絵本のショー、おばけの劇がそれぞれの場所にイスを並べています。一度に３つの劇場ができている日もあり、部屋全体が舞台のようになっていました。

たくさんの客席を用意したり、お客さんを前にしても堂々と進めたりする姿に、自分たちの考えたものを見てほしい、楽しいからこそ見せたい、という子どもたちの思いを感じます。次はどんなショーが開かれるでしょうか。（教諭・大塚美帆）

甘くなってね、夏みかん

年少　すみれ組

クラスでくらす

６月の中旬、すみれ組はお散歩へ出かけました。大学の中庭へ着くと広い芝生が広がっていて、子どもたちが嬉しそうに走って遊んでいると、目の前の建物の２階から「おーい、みかんほしい人～」という声とともに背の高い理事長先生が中庭に降りてきてくれました。その声を聞いて、「みかんほしい！」と子どもたちが応えます。理事長先生は木の高いところになっていた夏みかんをたくさんとってくれました。「わぁ！おおきい！」「食べてみたい」と子どもたちは嬉しそうにしています。早速、お部屋でのお弁当の時に食べることにしました。

いざ食べてみると「おいしー」と食べられる子もいれば、「うわぁ！すっぱい！食べられない！」という子もいます。何度も挑戦してみようとするけれど、「やっぱりすっぱくて食べれない」と食べたいけれども、酸っぱくて食べられない気持ちでいる子もいます。そんな時、「すっぱいなら甘くすればいいんだよ」という声が子どもから出てきました。

担任が「どうしたら甘くなるのかな？」と聞くと、「あのね、砂糖をいれれば甘くなるんだよ」「お母さんもね、梅も砂糖を混ぜて甘くするって言ってつくってたよ」と、子どもたちの中からアイディアが出てきます。クラスの友だちのその声を聞いて、どうしても食べたい気持ちが強かったのか「砂糖、いれたい！」とすみれ組の子どもたちは盛り上がります。そんな思いを実現すべく担任がレシピを調べ、氷砂糖を準備し、子どもたちが見守る中、瓶の中に砂糖と、切った夏みかんを交互に入れてみました。「この氷みたいな砂糖がとけたら夏みかんが食べられる」ということを伝えると、毎日、お弁当の時間になると「氷砂糖とけた？」と聞いてきて、冷蔵庫から持ってきて確認しています。氷砂糖が少しずつとけて、かたちが変化していく様子に「あと少しだ！」「まだかな～？」と子どもたちは待ち続けます。

家での生活の経験を、幼稚園でも言葉にしてクラスの友だちに伝えようとする姿が見られるようになっています。７月も半ばになり、すみれ組での１学期もあと少しという先日、氷砂糖がとけていました。「週明けに飲もうね」と子どもたちと約束しました。

「いつになるか分からない」、そのわくわく感に期待をもてるようになってきた子どもたちです。このお手紙が配られる頃には、すみれ組の子どもたちは夏みかんを食べていることでしょう。どんな味になっていたかな？

（教諭・小川結花）

やってみたい、これ楽しいね

２歳児クラス　ぴよぴよ

園児の登園後、小さい仲間たちがおうちの方と手をつないで保育室に遊びに来ています。

５月から２歳児クラスの『ぴよぴよ』が始まりました。白梅幼稚園には、来年度、新入園を迎える２歳児のお子さんを対象とした未就園児クラス『ぴよぴよ』があります。週１回クラスと週２回クラスがあり、それぞれ希望に応じて登録し、月２～４回、保育者やお友だちと一緒に保育室で遊びます。

到着すると、「おはよう」と保育者に出迎えられます。自分の荷物をしまい遊具を見つけて遊びだす子もいれば、お母さんから離れることがわかって「ママ～」「かえる～」と泣き出す子、その声を聞き、思い出して泣く子がいて、大合唱になることもあります。

子どもたちにとっては初めてのことで、不安や緊張もあったことでしょう。少しずつ慣れてくると、レールや車、ままごと、お人形やぬいぐるみのお世話など、自分のしたい遊びを始めるようになりました。遊んだ後にはお楽しみのおやつを食べます。絵本や手遊び、わらべうたに触れて、子どもたちからは思わず笑みがこぼれます。

ぴよぴよの生活も２か月が過ぎました。ひも通しや輪つなぎをしたり、積み木を高く積み上げたりして、少し難しいことにも「おもしろそう」「やってみたい」と取り組もうとする姿が見られます。また、ネコのぬいぐるみをたくさん車に乗せてお散歩に出かけると、気持ちが良くなったのか歌い始めたり、靴下を脱いでくつろいでいたりする子もいます。

ままごとでは場を共有しながらも、それぞれにお弁当やごちそうをつくり、「食べて～」と保育者に届けにきたりします。ピクニックに出かけると、できたものを友だちと一緒に頬張っている愛らしい様子も見られます。

病院セットから聴診器を持ってきて保育者の胸にあてる子がいると、それを見ていた子が熱を測ろうとしたりして、少しずつ周りの子の遊びにも目が向くようになってきました。

時には、使いたいものが重なってしまい取り合いになることもありますが、保育者と一緒に「かして」と相手に聞くことも始めています。自分だけではない、友だちとの関わりを丁寧に見ながら、子どもたち一人ひとりが「やってみたい」「これ、楽しい！」を見つけられる『ぴよぴよ』にしていきたいと思います。（主任・佐藤　恵）